

【記 事】

愛宕臨床栄養研究会 (ACNC) 第81回学術研究会

日 時：平成26年11月28日午後6時30分-8時

会 場：東京慈恵会医科大学大学1号館5階講堂

司 会：伊藤圭介（東京慈恵会医科大学附属病院薬剤部）

一般講演：東京慈恵会医科大学附属病院における 脂肪乳剤の使用実績と今後の課題

東京慈恵会医科大学附属病院薬剤部

千葉 圭恵

院内にNSTの準備委員会が発足し10年が経ち、現在では栄養管理を多職種で行うチームとして、カンファレンス、回診を行うとともに、NST専門療法士認定教育施設として人材育成にも取り組んでおり、院内の認知度も年々高まってきている。

今回、NST薬剤師が東京慈恵会医科大学附属病院における脂肪乳剤（イントラリポス20%®）の使用状況を調査したので報告する。

調査1：2014年7～9月において脂肪乳剤の投与患者を抽出し、脂肪乳剤投与速度を調査した。脂肪乳剤推奨投与速度（0.1 g/kg/時）で投与されていたのは41%で推奨速度を超えて投与されていたのは59%であった。なお、平均体重の低い患者ほど投与速度が遵守されていない結果となった。

調査2：2014年4～9月で中心静脈栄養法（TPN）単独もしくは脂肪乳剤併用それぞれ1週間以上使用患者に対しての肝機能値の投与前後の変動を比較した。TPN投与前から比較した肝機能値は、両剤を併用した患者の方が肝機能値の上昇は少ないという結果が得られた。

これらの結果から、長期にTPNを施行する際は脂肪乳剤の併用が肝機能への影響を抑えることに有用であったことが推測された。なお、脂肪乳剤が加水分解され十分に代謝されるよう、体重を勘案した脂肪乳剤投与速度の遵守が必要である。そのため現在、脂肪乳剤投与速度換算表を作成し、関連病棟の医師の協力により試行運用を進めている。

今後は院内に周知して脂肪乳剤の適正使用の推進に努めていきたい。

特別講演：炎症性腸疾患の栄養療法－脂肪酸コントロールの意義－

東京慈恵会医科大学附属柏病院消化器・肝臓内科

内山 幹

炎症性腸疾患（IBD）に対し、2002年に保険収載された生物学的製剤は、それまで達成困難であった粘膜治癒をも可能とし、長期にわたりストイックな食事制限を強いられてきたクローン病（CD）患者に多大な福音をもたらしたようにみえた。

しかし生物学的製剤の効果が減弱する二次無効の問題が浮き彫りとなった今、「再燃しにくいから作り」を目指した食事療法の重要性を改めて見つめ直すべきである。

東京慈恵会医科大学附属柏病院ではIBD患者に対し、やみくもな食事制限を課すのではなく、脂肪酸栄養学に基づき、摂取する脂肪酸の比率をコントロールする食事療法（n-3 diet）を時代に先駆けて実践してきた。本講演ではn-3 dietの話題を中心に、脂肪酸コントロールの意義について概説した。